

## エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの 哲学・教育論争について

— フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題 —

(その7)

永 冶 日 出 雄

Hideo NAGAYA

(教育学教室)

### I エルヴェシウスに対するルソーの批判

(『研究報告第25輯』1976年3月)

### II ルソーに対するエルヴェシウスの批判

(『研究報告第26輯』1977年3月)

### III—VI エルヴェシウスに対するディドロの批判 (上, 中, 下の一, 下の二)

(『研究報告第27輯』1978年3月, 『研究報告第32輯』1983年1月,  
『研究報告第31輯』1982年2月, 『研究報告第33輯』1984年1月)

### VI エルヴェシウスに対するディドロの批判 (下の三)

— 教育の役割と天才の本質 —

#### 5. 『人間論』第一篇へのディドロの批判 その1 — 環境と教育の役割について

エルヴェシウス著『人間論』第一篇は十五の章から成り, つぎのような標題を掲げている。「人々の間に認められる精神の不平等は, 身体の器官の精粗に基づく<sup>(1)</sup>とみなされてきたが, 教育の相違から必然的に生じたものにすぎない。」能力と性格の形成に決定的な役割を演ずるのは, 肉体など先天的な要因ではなく, 教育など後天的な要因である, とエルヴェシウスは主張する。このような教育決定論が中世的な人間観への大胆な排戦であったことを見逃してはならない。トマス・アクィナスが『神学大全』で説いたとおりカトリックの教義では, 各人の賢愚正邪は血統や身分や性別によって定められ, 封建的な社会秩序こそ神聖かつ最善とされた。こうした教義を揺がしたのは, 地理上の発見と自然科学の発展にほかならぬ。そして, 生理学や風土論の見地から人間を把握する試みは, 十八世紀の

ラ・メトリーとモンテスキューにおいて頂点に達していた。しかし、彼らの理論は肉体的条件や地理的環境を強調するあまり、宿命論に陥る危険をもつ。<sup>(2)</sup>

中世的な人間観と対決し、ラ・メトリーやモンテスキューの理論を克服するために、エルヴェシウスは広義における教育の概念を提示する。『人間論』第一篇で扱われる教育とは、訓練や勉学という活動に留まるのではない。それは人間形成におけるすべての後天的な要因、社会生活および社会的環境の総体を意味する。家庭環境や交友関係や社会制度が各人の精神形成にどれほど深い影響を及ぼすかを、順々にエルヴェシウスは明らかにしていく。超越的な神意や先天的な要因とは異なって、こうした広義の教育は人間の意志によって制御し改善することが可能とされる。誕生した瞬間から臨終の際まで人間の一生は教育の連続である、と楽天的なエルヴェシウスは言う。今日『人間論』を生涯教育の先駆的な著作と評価することも誤りではない。

<資料11>

**A. エルヴェシウス著『人間論』第一篇第一章 なにびとも同一の教育は受けない**

これからも私は学んでいく。私の教育ははまだ終っていない。いつ終るか。受け入れるのが不可能になったとき、すなわち息を引き取ったときである。私の一生は長期にわたる教育にほかならぬ。

二人の人間にまったく同じ教育を授けるにはどうすればよいか。まったく同じ環境に、まったく同じ立場に彼らを据えるがよい。現実にはありえない想定である。したがって、なにびとも同一の教育を受けないことは明白である。<sup>(3)</sup>

**B. 同書 第一篇第二章 教育が始まる時期**

生命と運動を授かる瞬間から子どもは最初の教育を与えられる。母胎のなかで病気や健康の状態を知らせることも珍しくない。やがて母親は出産する。子どもは四肢を動かし、産声をあげる。空腹になれば、欲望を感じず。飢えた子どもは口を開き、乳房を探して一心に吸う。数カ月が経過すれば、眼は見開き、種々の器官も強くなる。かくして子どもは次第にあらゆる印象を受け入れる。視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚、そのほかすべての魂の窓が開かれる。自然におけるあらゆる事物が大挙して押し寄せ、子どもの記憶に無数の観念を刻み込む。こうした人生の出発に際して、真に子どもの教師となるのはだれか。子どもの経験する様々な感覚が教師の役割を演ずる。

二人の子どもを同じ教師に託したと仮定せよ。文字を読んだり、教理問答書を暗記できるよう、この教師が同じ方法で教え込む。同一の教育を授けたと普通にはみなす。哲学者の判断は違う。哲学者の意見によれば、子どもの真の教師は周囲の事物である。事物という教師をとおし子どもは大抵の観念を獲得する。<sup>(4)</sup>

**C. テイドロ著『《人間論》への反駁』第一篇第二章**

〔『人間論』12頁〕「子どもの真の教師は周囲の事物である。」これは本当だ。だが、事物はどう教えるか。感覚をとおしてである。異なった身体組織においてはたして同一の感覚が生ずるだろうか。<sup>(5)</sup>

精神の形成に関するエルヴェシウスの論述は、ロックの『人間悟性論』やコンディヤックの『人間知識起源論』に立脚する。外的な事物に触発されて、各人の身体組織に感覚が生じ、これらが記憶や観念や判断へと発展する。こうした唯物論ないし経験論は、超越的な実在や生得観念の存在を強調するキリスト教の教義を根底から揺がすものであった。ロックやコンディヤックは事物と経験を知識の源泉とみなし、感性の作用や認識の発展を綿密に追っている。

若き日のエルヴェシウスを思想的な覚醒へと導いたのは、ロックの『人間悟性論』であった。しかし、『精神論』も『人間論』も存在や認識の問題にさして長く留まらない。種々の社会的要因がいかに認識の発展を左右するか。経験や生活の相違がいかに異なった能力や性格を形成するか。家庭、社会、道徳、政治等々の領域に拡大する彼の論述は、狭義の哲学という枠を超え、社会学的・教育学的な色彩が濃厚である。認識論や論理学を重視する多くの哲學家が、エルヴェシウスの著作を軽くみる一因がここにある。

能力や性格は経験と学習によって形成される、という教育決定論にディドロも基本的には賛成する。こうした見解は『百科全書』の基調であり、『《人間論》への反駁』第二篇原註における総括的な批判からも鮮明に読み取れる。しかし、後天的な要因を強調するエルヴェシウスに反論して、ルソーと同じくディドロは素質や体質の重要性を指摘する。より具体的な叙述を辿りつつ、両者の応酬を検討していこう。

<資料12>

A. エルヴェシウス著『人間論』第一篇第四章

事物は私たちにさまざまな印象を刻む

実際にさまざまな事物が私さちのうちにさまざまな感覚を惹起する。また、経験はつぎのように教える。同一の事物でも場合により異なった印象をもたらす、と。こうした印象の相違が蓄積して、人々の精神の間に多様性や不平等が生ずる。同じ国で産声を挙げ、同じ習慣や風習のもとで育てられ、同一の事物に接した人々のなかにも著しい精神的不平等が認められる。

静寂と平穩こそ魂を育てる絶好の環境である。そこでは情念の囁きも清澄な魂を乱せない。偶然が差し出す事物を私たちは注意深く眺める。それらのさまざまな側面が時間をかけて観察され、正確で刻明に記憶される。

少年期にはこのような偶然がとりわけ頻繁に現われる。悪戯をした少年が罰として部屋に閉じ込められたと仮定する。彼のほかはだれもない。なにをするか。窓際の花瓶を眺め、花を手に取り、その色や濃淡を観察する。退屈していることが少年の視覚を鋭敏にする。それは盲人の場合に似通う。一般に盲人は普通の人よりも鋭い聴覚をもっている。光の作用に眩感されず、注意の集中が容易だからである。ディドロ氏が評言したとおり、失った感覚を補うため、残された感官を開発することに、盲人は大きな利益を感じる。<sup>(17)</sup>

B. ディドロ著『《人間論》への反駁』第一篇第四章

〔『人間論』17頁〕「少年が部屋に閉じ込められる。彼のほかはだれもない。少年は花を凝視し観察する。」この論述には賛成したい。だが、天性の異なる少年の場合

はどうか。物臭さで眠り込んだと仮定せよ。あるいは執念深く親や教師を罵る姿を想像せよ。物臭さな少年や執念深い子どもであれば、花瓶があっても、何事も学ばない。<sup>(8)</sup>

<資料12>のAも経験や環境の役割を説く一文であるが、ディドロの名を明確に示した記述として注目される。本稿(その3)で論じたとおり、若干の証左からエルヴェシウスとディドロの間には個人的な接触もあったと推測できる。また、1758年の思想弾圧は『精神論』の著者と『百科全書』の編者を同じ状況に追い込んだ。しかし、『百科全書』について語る二つの原註を別とすれば、ディドロに関する言及は『人間論』全巻を通しこの個所だけである。『エミール』や『新エロイズ』でなされた間接的な論駁に対して、入念な反批判を書いたエルヴェシウスも、自分の遺作にディドロがこれほど膨大な反論を綴るとは予想しなかったであろう。

『人間論』第一篇第四章で援用されたディドロの言葉は、『盲人書簡』に依拠すると思われる。この書物においてディドロは盲人の生活や白内障の手術を実証的に考察し、五感の作用と意識の形成を仔細に検討する。こうして彼は神の定めた予定調和や生得観念の存在に疑問を投げかけ、唯物論の方向へと踏み出した。<sup>(9)</sup>

1748年に刊行された『盲人書簡』には鋭敏な聴覚や触覚を発揮する盲人が色々と描かれている。しかし、エルヴェシウスの引用するディドロの言葉に逐一該当する文章は見当たらない。ちなみに『百科全書』第一巻で項目『盲人』を担当したダランベールは、眼の見えない人の鋭い聴覚や触覚について語り、『盲人書簡』の概要を紹介した。エルヴェシウスの言及はむしろ項目『盲人』の叙述に近い。なお、ディドロは『盲人書簡補遺』を1782年の『文芸通信』に発表する。奇妙にもこの小品の論述が『人間論』第一篇第四章の引用によく符合し、「残された感官を開発する」との表現をも含む。ただし1771年に世を去るエルヴェシウスが、1782年の『文芸通信』を読むことはありえない。

<資料13>

A. ディドロ著『盲人書簡』

ル・ピュイソーの盲人は熱の強さによって火への距離を測ります。液体の注がれる音で容器の満ち加減を知り、頬に触れる空気の動きで周囲の物体を察します。大気のなかに生ずる微かな変動にも敏感で、袋小路か否かさえ判別できるのです。また、彼は物体の重さや容器の大きさを見事に言い当て、両腕を正確な秤として役立てたり、指を精密な物差しのように用います。だから、こうした静力学の計算を行なう際には、目明きが二十人いても、ひとりの盲人に敵わないほどです。盲人にとって色々な物体の肌触りは音声と同じように多種多様でしょう。したがって、取り違えたほうが楽しい場合は別として、盲人がほかの女性を自分の妻と間違える怖れはありません。ただし盲人ばかりの国では女性が共有にされるか、不義が法律によって厳しく処罰されるでしょう。なぜなら、そこでは女性が愛人と打ち合せておいて、簡単に夫を裏切ることができるのです。<sup>(10)</sup>

B. ダランベール「盲人」(ディドロ=ダランベール編『百科全書』第一巻)

生れつき眼の見えない人もあり、事故や病気のため盲目になる人もいる。視力を喪失させる疾患と原因を論ずることは当面の課題でない。それらを知るには本事典の関連項目を参照してほしい。この項目では失明について哲学的考察を試みるに留めよう。

視覚は私たちの眼前に数多くの事物を並べ、注意を拡散させる。視覚を奪われた人達には注意の集中がはるかに容易であり、ほかの感官によって事物を美事に把握する。多くの盲人が繊細な触覚や聴覚を有するのは、主として以上の理由による。視覚が欠けている埋め合せに、ほかの感官が生れつき優秀なわけではない。事故で盲目になった人を考えてみよう。彼に残された感官が、予想もしなかったように役立つ。注意が拡散せず、集中するからである。眼が見えないのに、驚くべきことを為し遂げる者は、大抵生れつきの盲人である。<sup>(11)</sup>

### C. ディドロ著『盲人書簡補遺』

生れるとほとんど同時に視覚を失った人達のなかで、メラニー・ド・サリニヤック嬢こそ空前絶後の驚嘆すべき人物である。(中略)

残された感官を開発するよう、幼いときから家人はサリニヤック嬢を訓練し、驚くばかりの成功を収めた。触覚によって彼女は物体の形を確かめ、最良の眼の持主が見逃した特徴すら指摘する。彼女の聴覚と嗅覚は絶妙であった。天気が晴か曇か、歩いているのが広場か街路か、街路は通り抜けできるか袋小路か、出口が開いているか閉じているか、広々とした家に入ったか狭苦しい部屋に入ったか。これらを彼女は空気の圧力と大気の状態によって判断した。四方を囲まれた場所の広さは足音の具合や声の反響で測定した。家を一巡して、間取りを頭に畳み込み、目明きの人達に危い所を注意することもあった。「注意なさって。低い門ですの。」<sup>(12)</sup>「そこで一段高くなりますよ。」

## 6. 『人間論』第一篇へのディドロの批判 その2 — 天才の本質をめぐって

エルヴェシウスとディドロの論争において素質や環境の問題はただちに天才の問題へと発展する。天才への期待は彼らの著作の主要な題目のひとつであった。環境決定論を説くエルヴェシウスは『人間論』の随所で英才教育の方法を提示する。また、ディドロが画一的な教育への危惧を表わしたのも、人材の開発と天才への配慮を考えたからである。

進歩的な思想家と評価されるエルヴェシウスとディドロの著作のなかで、天才の問題が重要な位置を占める事実には、多くの人々は驚くかも知れない。今日の日本では無数の論稿が教育の機会均等や共通の教育内容を強論する反面、各人の適性を等閑にしている。素質と個性の問題に注意を促す論者も、発達の遅れた子どもや学校からはみ出す生徒を念頭を置く場合が多い。いわゆる差別・選別の教育を警戒するあまり、<sup>(13)</sup>学界の趨勢は天才の本質や英才の育成に関する研究を回避する傾向にある。基礎学力の低下と少年非行の増大に対処することが教育学者の使命であり、天才を待望したり、人材の開発を勧める理論はつねに反動的で非民主的であろうか。クレッチュマーの名著『天才の心理学』のほか、<sup>(14)</sup>この分野における貴重な業績として筆者は魅力と精彩に富む乙竹岩造の著作を挙げておく。<sup>(15)</sup>

さて、人間形成の後天的要因を強調し、エルヴェシウスは第一篇第八章「偶然はしばし

ば卓越した人物を育てる」において何人かの天才を実例として掲げる。予想しない環境の変化や周囲からの刺激が、ヴォーカンソンの発明やミルトンの詩作やモリエールの演劇をもたしたではないか。こうした説明に反論するため、ディドロは天才の素質や特性を明らかにしてゆく。

この章でとりわけ注目されるのは、ルソーの生涯に関する叙述である。ルソーが『精神論』を批判し、『新エロース』第五篇で素質や体質の相違を強調したことは本稿(その1)で述べた。これに反論するエルヴェシウスはルソーをも環境と偶然の所産と説明し、彼の天才的な活動を素描する。こうした人物評にディドロは『《人間論》への反駁』のなかで逐一批判を加える。ルソーの人生行路をめぐる同時代人の証言として、これらの叙述は興味深い資料と言えよう。

<資料14>

A. エルヴェシウス著『人間論』第一篇第八章

偶然はしばしば卓越した人物を育てる

いかにして天才を生むか。一定の学問か芸術に注意を熱心に集中させるがよい。では、どうすれば注意を集中できるか。学問か芸術に熱烈な趣味を抱けばよい。そうした趣味は純然たる自然の賜物ではない。人間は観念ももたず、趣味ももたずに産声を挙げる。観念も関心も後天的に形成され、周囲の環境に左右される。したがって、これまで示したとおり、天才とは事件や偶然の複雑な産物にはかならぬ。

ルソーは私の意見に反対である。だが、彼の生涯こそ偶然の作用を痛感させる範例である。

上流社会に這入りこんだルソーは、幸運にも大使に随行するよう命ぜられる。やがて大使と衝突し、政治の世界を諦めて学芸の道を選んだ。しかし、弁論に専念するか、音楽に精進するか。彼の趣味は弁論にも音楽にも向くように思われ、しばらく戸迷いが続く。ついに一連の状況がルソーに弁論を選ばせた。違う状況のもとでは音楽家を志したであろう。華麗な歌姫に可愛がられたら、彼も音楽を捨てはしない。愛はフランスのプラトンを豎琴の名人に変えたかもしれぬ、彼に弁論の道を選ばせた偶然はなにか。それは彼の秘密であり、私には判らない。その分野における最初の成功が、選択を決定的にしたことだけは確かと思われる。

ディジョンのアカデミーは弁論の懸賞論文を募っていた。その課題は奇妙なものであった。すなわち、「学問は社会に対し有益であるか、それとも有害であるか。」この問題への効果的方法は、学問に反対する観点から論ずることである。ルソーが気が付かぬはずはない。そうした観点に立脚して、ルソーは流麗な論文を作成し、絶讃を博した。論文の入賞によって生涯の新しい時期が始まる。彼の栄誉も不幸もここで芽生えた。

みずからの華やかな論文に陶醉し、ルソーは哲学者の言葉ではなく、雄弁家の美辞麗句へと傾いた。逆説への愛に駆られて、なにを犠牲にするのも構わない。どうすれば逆説を貫ぬけるか。完全な野蛮人、技芸も産業も知らず、いかなる未開人よりも遅れた人種が、ロンドンやアムステルダムの文明国民よりも有徳で幸福だ、と説くがよい。実際このようにルソーは判断し主張した。

みずからの弁説に欺かれて、ルソーは雄弁家の資格に満足し、哲学者の資格を放棄する。かくして最初の成功が以後の誤謬をもたらす源泉となった。些細な原因もときには重大な結果を惹き起す。異なる意見には激し易く、奇矯な言動を好むので、やがてルソーはパリと友人から遠ざかる。彼はモンモランシーに隠遁して、『エミール』の執筆と刊行に努める。『エミール』の著者を襲ったのは嫉妬と無知と偽善であった。ルソーの雄弁は全ヨーロッパから高く評価されながら、フランスでは迫害に晒される。〈居るところでは苛められ、居ないところでは讃えられる。〉この章句はルソーにこそ当てはまる。ついにスイスでも身を隠し、迫害への怒りに燃えて、彼はパリ大司教に有名な書簡を書いた。以上が人間のすべての観念の実態である。いかなる栄光も不幸も眼に見えぬ糸で最初の事件と繋っている。数多くの卓越した人物と同じくルソーも、偶然が造り上げた傑作と言えよう。

〈原註〉 学問への素質として人間は生まれながらになにを有するか。比較し結合する能力だけである。事物と事物との関係、および事物と人間との関係を考察することにあらゆる精神作用はまさしく還元できる。こうした能力については第二篇で検討しよう。

#### B. ディドロ著『《人間論》への反駁』第一篇第八章

『人間論』26頁および27頁]「いかにして天才を生むか。注意を熱心に集中させるがよい。」「天才とは偶然の産物にはかならぬ。」

奇妙な主張だ、とだれしも感ずる。血の滲むほど自分の指を噛んでも、天才にはなれない。なんらかの偶然が私を天才に変えてくれる、と夢想したほうがよい。それ以外には期待できない。

著者が主張するとおり考えてみよう。重要な事柄だけに注意を熱心に集中させれば、天才になれる。では、どんな身体組織であれば、熱心に専念できるのか。

精神を長く厳しく緊張させることが、多くの人々にはできない。彼らはニュートンやライブニッツやエルヴェシウスとは違う。彼らを考慮しないでもよいのか。

『人間論』 同上]「学問への素質として人間は生まれながらになにを有するか。比較し結合する能力だけである。」

それでもよい。だが、比較し結合する能力はどの個人でも同じであろうか。子どもと子どもの間でも、おとなとおとなの間でも能力の相違はある。そうした格差を埋めることはつねに可能であろうか。能力の格差は訓練や勉勞によってのみ埋められる。出世や昇進を犠牲にして努力する場合もあろう。凡人が筋肉や手足の硬さを解きほぐす間に、駿馬は目的に着いてしまう。どこでも凡人の足取りはなんと遅く重々しいとか。

『人間論』27頁]「だが、ルソーの生涯こそ偶然の作用を痛感させる範例である。(中略)彼に弁論への道を選ばせた偶然はなにか。それは彼の秘密であり、私には判らない。」

その秘密は知っている。私から言おう。ディジョンのアカデミーはつぎの題目で懸賞論文を募集していた。「学問は社会に対し有益であるか、それとも有害であるか。」私はそのときヴァンセンヌの城館にいた。面会に来たルソーは、どんな立場で懸賞論文を書いたらよいか、偶々私に相談した。「迷うことはない。ほかの人達とは逆の立

場を選ぶがよい。」これが私の助言だった。「もっともだ。」とルソーは応えて、一所懸命に努力した。

ルソーを置き去りにして、再びエルヴェシウスと議論しよう。ヴァンセンヌにいたのが私ではなく、ジュネーヴ市民ルソーであったと仮定せよ。私がヴァンセンヌを訪れ、懸賞論文についてルソーに相談する。彼もまた私と同じような助言を与える。ここで考えてほしい。詭弁を連ねて下らない逆説を主張するために、はたして私が三カ月も四カ月も費やすだろうか。そうした詭弁を私がルソーのように華麗な色調で描けるだろうか。かつまた、精神の遊戯として芽生えたものから、私が哲学体系を造り出せるだろうか。「アペールよ、迷信深いユダヤ人にそれを説得できるか。私はできない。」

ルソーはルソーであったから、以上に述べたことができた。私は私であったから、ほかのことしかできなかった。

エルヴェシウスはルソーに関する叙述をつぎの文章で締めくくる。「数多くの卓越した人物と同じく、ルソーも偶然が造り上げた傑作と言えよう。」以下のように考えたら、『人間論』の真意と異なるだろうか。空き缶に火薬か雷銀が詰められたが、しばらく何事もなかった。やがてディジョンから火花が飛び、引火して爆発を惹き起すと。

火花から火薬や雷銀ができたり、火薬や雷銀から火花が発するだろうか。こうしたエルヴェシウスの主張は条理に合わない。

偶然がルソーの造り上げた傑作でないように、ルソーも偶然の造り上げた傑作ではない。

ディジョンの直載な質問がなければ、ルソーの論文は生れなかったか。

デモステネスが壇上で雄弁を発揮したことは有名である。だが、雄弁になる素地は、演説を始める前に作られている。

岩に生えた毛氈苔は何百年経っても、実を結ばない。土壤に種が播かれれば、実のなることも期待できる。しかし、土壤から種子は生じない。

過去から未来へといかに多くの人達が、真価を発揮せずに消え去ることか。裏町の薄暗い画廊に掛けられた油絵の傑作に、これらの人達を喻えてもよい。そうした画廊では注目も称讃もされず傑作が色褪せていく。<sup>(16)</sup>

<資料14>でもエルヴェシウスの主張とディドロの論駁の間には力点や脈絡の相違が感じられる。また、『学問芸術論』の成立をめぐる両者の説明は、『告白』に綴られたルソーの回想ともやや異なる。だが、そもそもディドロはなぜ天才や英才教育の問題を執拗に繰返すのか。こうした問題が論義される歴史的背景とディドロの思索の道程を本項では綿密に追ってみよう。

啓蒙思想が提起した天才の問題について歴史的な意義と背景を明確にしたのはディークマンである。彼の論文「ディドロにおける天才の概念」は私たちが壮大な展望と卓絶した解釈へと導く。ディークマンによれば、ディドロの胸中に潜む天才への期待は、ブルジョアジーの発展と啓蒙運動の高揚に照応するものであった。日増しに伸長する十八世紀のブルジョアジーは、中世的な規範や貴族社会の理想に倦き足らず、活動的で創造的な人間類型を摸索していた。また、新たな時代を切り拓く集団として哲学者たちが登場し、啓蒙運



動を開始する。こうした状況のなかで聖者や宮廷人や教養人など従来の理想は後退し、天才という概念が最高的人类型を意味するに至った。ディドロが期待する天才とは、一芸に秀でた才子才女ではなく、人間精神の到達できる極致、時代を革新する原動力なのである。<sup>(18)</sup>

ディドロの芸術理論はヘルダー、レッシング、ゲーテなどの作品の先駆として評価できる。こうしたディークマンの位置づけに啓発され、天才や創造の問題についていくつかの研究がなされた。ここでは労作としてブラヴァル著『ディドロの逆説なき美学』<sup>(19)</sup>およびヴァルダウアー「ディドロの思想における社会と創造的人間の自由」<sup>(20)</sup>を挙げておく。ただし、本論の問題設定からすると、これらの研究も文学と芸術の領域に偏するよう感じられる。ディドロにおける天才と人材開発への関心が政治改革への希求ならびに哲学者たちの社会参加と密接に関連することを、私はふたつの資料をとおり明確にしたい。

第一の資料は1757年に公刊された『百科全書』第七巻である。この巻に含まれる項目「天才」はネジョン編著作集やアセザ編全集に再録され、ディドロの作品と考えられてきた。しかし、1939年にヴェントウリ著『ディドロの若き日』において、「天才」の執筆者がサン・ランベールにほかならぬと論証された。<sup>(21)</sup>ちなみにサン・ランベールは『精神論』の著者と親交があり、貴重なエルヴェシウス小伝を遺している。ヴェントウリの見解を支持するヴェルニエールは、サン・ランベールの単調な文章がディドロの助言と加筆をとおして光輝ある「天才」に仕上がったと推測する。<sup>(22)</sup>この項目を検討すれば、『百科全書』に結集した哲学者たちが天才の問題をどう考えたかが把握できよう。第二の資料は『カザリン二世のための覚書』にほかならぬ。サン・ペテルスブルグに滞在したディドロは、ロシア女帝に建議するため行政や経済や教育に関して64の覚書を綴った。『ロシア大学案』とは異なっており、そこでは人材の開発や育成が主題のひとつに数えられ、国政との関連で熱心に論ぜられる。

#### <資料15>

##### A. サン・ランベール「天才」(ディドロ=ダランベール編『百科全書』第七巻)

政務における天才は状況にも法律にも慣習にも拘束されない。芸術の天才が趣味の規範に、哲学の天才が学問の方法に拘泥しないのと同じである。危機にあってはしばしば天才が権力を掌握し、祖国を滅亡から救う。体系は哲学よりも政治においてはるかに危険であろう。哲学者の妄想は本人を誤謬へと導くにすぎない。政治家の迷妄は国民全体を錯乱と不幸に陥れる。

したがって、戦争や国政の天才は鬼神のような俊敏さを発揮し、無数の可能性のなかから最善の手段を選択し遂行する。政務は注意と連携と忍耐を必要とするが、一刻も遅滞してはならない。アレクサンダーとコンデは情勢を見抜く達人であり、戦闘の当日には靈感を授けられたと言う。充分に考える余裕もない状況で、最初の着想が最善の方策であることを要する。敵軍の配置と兵馬の動静を彼らは一望のもとに把握し、果敢な作戦を指令する。しかし、大会戦を指揮する場合にはチュレンヌとマルブルールがアレクサンダーやコンデに勝ったであろう。

学問でも芸術でも政務でも天才は事物の本性を変える。天才の個性は触れるものすべてに浸透する。天才の英知は過去と現在を突き抜け、未来を照し出す。<sup>(23)</sup>

B. デイドロ著『カザリン二世のための覚書』第二七

個別教育とその欠陥。欠陥を補うための登用試験。

私たちの時代にも偉大な人物はすくなく存在します。ただし、彼らはたがいに隔離され、孤立したままです。コルネイユ、ラシーヌ、モリエール、ボワロー、ラフォンテーヌ、モンテスキュー、ダランベール、エルヴェシウス、ルソーなどの生涯を思い起してください。天成の情熱に動かされて、彼らは自分の道を選んだかもしれません。しかし、絶えざる刻苦勉強がいつまでも無視されていたら、はたして彼らは成功したでしょうか。

哲学者や詩人や文学者について申し上げたことは社会のあらゆる職務に当てはまりません。情熱に依存する度合のすくない職務ほどそうなのです。

ギリシアとローマを除けば、国家を支える基礎のなかに個別教育が欠如しております。

アテネとローマでは天分と才能のある人間がすべて国家の要職を志願し、立派な地位に就きました。キケロは執政官でした。彼は成り上り者と非難もされました。賤しい身分に生まれたデモステネスは、みずからの才幹によって大使となり、共和国の主席となりました。だれでも奴隷の身分から自由な身分に、自由な身分から高位高官へと上昇できたのです。過去の自分を忘れるのは愚か者だけでした。なにを目差して国民は競争したでしょう。造宮官や司法官や県知事や執政官になるためです。私たちのように仲間や身内の喝采を得るためではありません。けち臭い利得が私たちの野心を幻惑し、私たちの魂を哀れな陶醉へと誘います。やがて老境に入れば、哲学者のように人生を憐れみ、無為に浸りつつ衰えていくでしょう。些細な事柄に嫉妬の炎を燃やし、わが身を焼き尽すのが私たちの姿です。

軽薄で凡庸な民族に落ちぶれぬためには、ひとつの方策を試みるしかありません。それを私は進言しましょう。

帝国のすべての職務、もっとも重要な地位すらも競争試験に付してください。大法官の地位すら例外にははいけません。(中略)

身分の高くない人達を国家の要職から離ざけるよう、枢機卿リシュリューはルイ十三世に助言したと伝えられます。なんと忌まわしい原則でしょう。才能や天分に恵まれた人材のほとんどを無用な存在と宣告したのです。

登用試験について一連の制度をここで女帝陛下に提案したいと存じます。

王国にはひとつの宮殿しかありません。宮殿の周囲には十万もの民家が連なっています。神が私たちに天才を授けます。宮殿のなかで一回生まれる間に、周囲の民家では十万回生まれるでしょう。

文明社会の弊害のひとつは、天才の首を締め、路頭に迷わせることです。非凡な素質が注目もされず、どれほど消えていくでしょう。価値ある存在になれるという希望こそ、埋れた才能を奮起させます。そうした希望は文明社会への治療薬でもあります。目標がなければ、何事も行いません。細かな計算に没頭する者に、偉大な事業は期待できません。<sup>(24)</sup>

古典主義において芸術作品の価値は伝統的な規範や趣味に適合するか否かで判断された。ヴォルテールやエルヴェシウスの主知主義は宮廷社会の価値から十分に離脱していない、とディクマンは指摘する。ヴォルテールは学芸に通暁した人物を天才と呼び、エルヴェシウスは人材の開発のため観念の連合と系統的な習得を強調した。天才の概念の著るしく異なることが、エルヴェシウスとディドロの論争を激化させたと思われる。

多岐にわたる数多くの著作のなかでディドロは、様々な天才に関する伝承や見聞を織り込んだ。これら天才の活動は揃って創造的で非合理的である。どのような分野や時代でも、天才が従来からの価値と規範を乗り越えることには変りない。独創や飛躍はエルヴェシウスにとっては偶然の所産にすぎず、ディドロにとっては天才の本質にはかならずぬ。『百科全書』の項目「天才」と同様に、ディドロの遺稿「絵画、彫刻、詩人に関する断章」は天才の創造性について語る。また、天才は理性と理論よりも、むしろ靈感や狂熱や想像力によって鼓舞される。1757年の戯曲『私生児に関する対話』には天才の仕事に伴う非合理的な契機が描写された。ギルマンの論文「ディドロにおける創造と想像力」もこの描写に注目し、<sup>(26)</sup>ディクマンとブラヴァルもここに作者自身の創作体験を読み取る。<sup>(27)</sup>

<資料16>

A. ディドロ「絵画、彫刻、詩文に関する断章」 趣味について

私はアリストテレスに救いを乞う。だが、完璧な作品から絶対的な規範を演繹するのは、誤った批評の仕方である。喜びを与える方法は無数に存在するではないか。しばしば天才は絶対的な規範を蹂躪して成功を収める。そうした規範を信じて疑わぬ羊の群は神々に背いたと天才を非難する。

× × ×

規範は芸術を陳腐にする。有益であるよりも、有害である場合が多い。私の真意を理解してほしい。規範は普通の人間には有益であり、天才には有害であった。

× × ×

ロンジンの小人族は短軀を誇りとし、縛結で身体成長を推した。この物語をわが身に当てはめるのがよい。臆病な人間はみずから萎縮して、思考しない。

× × ×

タソスのポリグノトウとアテネのミコノスが単色画をやめて、<sup>(28)</sup>四色で描き始めると、そうした試みを古代の美術愛好家は神を怖れぬ放縦とみなした。

B. ディドロ著『私生児に関する対話』 第二の対話

ひとりの天才を想定してください。彼は都市や隣人から遠ざかります。心情の導くままに、どこへ赴くのでしょうか。清冽な泉に涙を流し、墓石に花束を捧げ、軽い歩調で牧場の若草を踏み、緩やかな足取りで荒涼たる平原を通るのです。雄大な廃墟を眺めたり、森林の暗闇に隠れもします。秘密と戦慄を好んで放浪し、洞窟に潜んで靈感を待ちます。深山の滝の音に合わせて、歌声を続けるのはだれでしょう。茫漠たる原野に崇高さを感じるのはだれでしょう。孤独と静寂のなかで沈思黙考するのはだれでしょう。これが詩人の姿です。彼が湖畔に着いたと想像しましょう。岸辺を逍遥しながら、天才は目覚めるのです。(中略)想像力に点火され、情念が燃え始めました。

周囲の人達はこれに仰天し迷惑し、さらには憤慨し敵対するでしょう。熱情を感じたことも、崇高な想を抱いたこともない人達は、逃げ出すほかありません。いまこそ詩人は熱情に捉えられたのです。どうして落着いておれましょう。彼の胸が震え始め、震動は迅速かつ精妙に筋肉の末端にまで拡がります。それは震動と言うよりも、長期にわたる病熱です。私たちに陶酔させ窒息させる病熱、身を焦がし、命を奪う病熱と申してよいでしょう。だが、これこそ感染する者に靈氣と生命を授けるのです。病熱が昂ずるにつれて、色々な幻想が繰り広げられます。詩人の情念は狂わしいまでに舞い踊ります。無数の観念が奔流のように横溢し交叉し渦巻きます。こうした観念を詩文に表現し、病熱を鎮静するほかありません。<sup>(29)</sup>

ディドロの生涯を貫くものは、旺盛な探求心と自由奔放な発想である。〈資料16〉はそうした精神活動の秘密を興味深く語る。しかし、『百科全書』の偉業を考えると、類稀な組織力と強烈な使命感にこそディドロの天才を第一に認めたい。人類に多大の貢献を成し遂げるため努力と精進が欠かせないこと、後世の与える称讃によって自己の生命と事業が不滅となることを、『百科全書』の編者は確信していた。エルヴェシウスに対するディドロの天才論争が、傍観者の見地からではなく、知識人としての使命感と自己への叱咤激励から発したことは明らかである。下記の資料はそのような真情を吐露したものと解釈できる。

〈資料17〉

**A. ディドロ「百科全書」(ディドロ=ダランベール編「百科全書」第五巻)**

当初の構想に従って『百科全書』を仕上げるには、数世紀にわたる努力を要する、と私たちは悟った。すなわち、無数の素材を収集して適切な形式を与え、様々な分野や項目の範囲や長さを定め、あるいは削除しあるいは補足することが必要とされる。だが、最大の困難のひとつは、いかに粗雑なものでもとにかく『百科全書』を刊行することにある。こうした難事を成し遂げたという名誉が、私たちには授けられる。哲学者の世紀だけが『百科全書』を企画できること、そのような世紀がすでに到来したことは明白である。『百科全書』を完成する人達は不滅の名声を留め、創業者である私たちも忘れられはしない。甘美で喜ばしい想念、世を去ったあとも偲ばれるという想念に励まされる。現在ですら『百科全書』への讃辞を耳にすることがある。私たちは後世の人々を愛し尚び、彼らの教育と幸福のため日夜奮闘している。こうした人々がどれほど『百科全書』の刊行を称えてくれることか。みずからの高貴な営みを不滅のものとし、人生の価値ある瞬間を虚無から救い上げようと、向上心が湧き起るのを感じず。<sup>(30)</sup>

**B. ディドロ著『《人間論》への反駁』第三篇**

だれかが物理学や解剖学や力学や数学や史学に没頭したと仮定せよ。一連の研究からある仮説が得られ、それが実験的に証明される。こうした発見を『人間論』の著者は偶然と呼ぶ。

代数学者でも幾何学者でもあるデカルトは、代数の記号で数も線も面も立体も表現

できること、代数の真理も図形に置き換えたり翻訳して表現できることに気付く。かくして代数を幾何に適用する方法が発見された。『人間論』の著者はこれも偶然と呼ぶ。(中略)

エルヴェシウスに言うがよい。天才を準備するのは、自然であり、身体組織であり、純粋に肉体的な要因である。だが、天才は後天的で精神的な要因によって開花する。すなわち、<sup>(31)</sup> 不断の研鑽と知識の蓄積をとおして非凡な仮説に到達し、実験的に証明されて不滅の名声を得る。

(昭和59年8月4日受理)

### 註

エルヴェシウスとディドロの著作に関して、註においては下記の略号を使用する。

- HHL: C.-A. HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, Londres, Société typographique, 1773. 2 volumes.
- HHL: C.-A. HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*. dans *Oeuvres complètes*, éd. L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795. 14 volumes.
- NN: エルヴェシウス著、根岸国孝訳『人間論』、明治図書、1966年。
- DRL: D. DIDEROT, *Réfutation suivie de l'ouvrage d'Helvétius intitulé, l'Homme*. dans *Oeuvres complètes*, éd. R. Lewinter, Paris, Club français du livre, 1971. Tome XI.
- NE: ディドロ著、野沢協訳「エルヴェシウス『人間論』の反駁(抜粋)」小場瀬卓三、平岡昇監修『ディドロ著作集』第一巻、法政大学出版局、1980年。
- DOD: D. DIDEROT, *Oeuvres complètes*, éd. H. Dieckmann, J. Proust et J. Varloot, Paris, Hermann, 1975-. 33 volumes (14 parus).
- DOE: D. DIDEROT, *Oeuvres esthétiques*, éd. P. Vernière, Paris, Editions Garnier Frères, 1965.
- DM: D. DIDEROT, *Mémoires pour Catherine II*, éd. P. Vernière, Paris, Editions Garnier Frères, 1966.
- DDE: D. DIDEROT et J. D'ALEMBERT, *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société des gens de lettres*, Paris, Briasson, David, Le Breton et Durand, 1751-1765. 17 volumes.
- OHD: 小場瀬卓三、平岡昇監修『ディドロ著作集』第一巻および第二巻、法政大学出版局、1976年～1980年。

- 1) HHL, Tome I, p.21. HHL, Tome VII, p.23. cf. NN, p.22.
  - 2) 拙稿「エルヴェシウスの思想の構造と史的位罫——『精神論』を中心として」(『科学と思想』第22号、1979年7月。pp.134-137.)
  - 3) HHL, Tome I, pp.21-22. HHL, Tome VII, pp.23-24. cf. NN, p.23.
  - 4) HHL, Tome I, pp.23-24. HHL, Tome VII, pp.25-26. cf. NN, p.24.
  - 5) DRL, pp.469-470.
  - 6) 拙稿、前掲書。pp.126-131.
  - 7) HHL, Tome I, pp.31-33. HHL, Tome VII, pp.34-36. cf. NN, pp.27-28.
  - 8) DRL, p.471.
  - 9) A.W. WILSON, *Diderot*, New York, Oxford University Press, 1972. pp.97-98.
- なお、ヴォルテールとコンディヤックも白内障の手術に強い関心を示した。

- cf. E. de CONDILLAC, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, dans *Oeuvres complètes*, éd. A.F. Théry, 1970. Genève, Slatkine reprints, Tome I, pp.186–191.
- 10) D. DIDEROT, *Lettre sur les aveugles à l'usage de ceux qui voient*, dans DOD, Tome IV, pp. 24–25. cf. OHD, Tome I, p.54.
- 11) J. D'ALEMBERT, *Aveugle*, dans DDE, Tome I, p.870.
- 12) D. DIDEROT, *Addition à la Lettre sur les aveugles*, dans DOD, Tome IV, pp.101–102. cf. OHD, Tome I, pp.100–104.
- 13) 教育社会学の見地から英才やエリートについて研究を続けた麻生誠はつぎのように述べする。「私がエリートと教育をテーマとして研究に着手した頃は、まだ教育学にとってはアンチ・エリート主義が支配的でエリート養成はある意味でタブーとなっており、正面からこの問題に取り組んだ研究者は皆無であった。」麻生誠著『エリート形成と教育』福村出版、1978年。
- 14) なお、この書物でクレッチマーは最後の一章をルソーの意識や性格の分析にあて、予言者的な天才の特徴を浮彫りにしている。クレッチマー著、内村祐之訳『天才の心理学』岩波書店、1982年。pp. 294 – 314。
- 15) 明治の末に天才と英才教育に関する講演をまとめて、乙竹岩造は言う。「抑モ 顧才教育ノ事タル、刻下並ニ将来ニ於テ必ず大ニ起ルベキ緊急適切ノ重要問題タルヲ信ジテ疑ハズト雖モ、然カモ世ノ教育家ガ、浸ニ空論ニ馳セ、徒ニ新奇ヲ追フノ時弊ヲ脱却シ、最モ確實完密ナル研究ノ上ニ、進歩的態度ヲ執クテ着々改善ノ歩武ヲ前メラレンコトヲ熱望シテ己ヌザルノ余リ、聊カ卑見ヲ披歴シテ以テ大方ノ参考ニ供セントス。」乙竹岩造著、『顧才教育』、目黒書店、1912年。pp.1–2。
- 同じ著者による一層詳細な研究としては第2次大戦の直後に完成されたつぎの書物がある。乙竹岩造著『天才の本質と教育技術の革新』培風館、1952年。この書物は古今東西にわたる三百人以上の天才の分析を含むとともに、祖国再建と英才育成の悲願に貫ぬかれている。しかし、こうした乙竹岩造の壮図は十分に継承されていない。
- 16) HHI, Tome I, pp.51–56. HHL, Tome VII, pp.36–60. NN, pp.36–37, 39.
- 17) DRL, pp.474–477.  
『学問芸術論』の成立に関するディドロの説明を、ルソー著『告白』の有名な叙述と比較されたい。  
cf. J.-J. ROUSSEAU, *Les Confessions*, dans *Oeuvres complètes*, éd. B. Gagnebin et M. Raymond, Paris, Editions Gallimard, Paris, 1959. Tome I, pp.350–352. ルソー著、桑原武夫訳『告白』岩波書店、1965年。中、pp. 119 – 121。
- 18) H. DIECKMANN, *Diderot's conception of genius*, in *Journal of the History of Ideas*, Volume II, 1941. pp.151–155.
- 19) Y. BELAVAL, *L'Esthétique sans paradoxe de Diderot*, Paris, Editions Gallimard, 1950. pp.145–161.
- 20) J.L. WALDAUER, *Society and the Freedom of the Creative Man in Diderot's Thought*, in *Diderot Studies V*, 1964. pp.17–22.
- 21) F. VENTURI, *Jeunesse de Diderot*, traduit par J. Bertrand, Paris, Albert Skira Editeur, 1939. pp.344–345.
- 22) P. VERNIERE, *Introduction*, dans DOE, pp.5–8.
- 23) J.F. SAINT-LAMBERT, *Genie*, dans DDE, Tome VII, pp.583–584.
- 24) DM, pp.162–163, 167.
- 25) H. DIECKMANN, *op.cit.*, pp.157–159.
- 26) M. GILMANN, *Imagination and Creation in Diderot*, in *Diderot Studies II*, pp.212–213.
- 27) Y. BELAVAL, *op.cit.*, p.150.  
H. DIECKMANN, *op.cit.*, pp.164–165.
- なお、乙竹岩造はディドロを天才のひとりに数え、以下のような挿話を紹介する。「天才に一ツ面白い性質は健忘と言うことであって、(中略)ディドロと言う人は、馬車を雇って家に帰って来た

のであるが、その儘部屋に入って仕舞って賃銀を払うことを忘れ、夕方に成って終日待つて居た御者から催促を受けて、一日分の賃金を払わせられたと言う話もある。」乙竹岩造著『顛才教育』, pp. 78, 83。

- 28) D. DIDEROT, *Pensées détachées sur la peinture, la sculpture et la poésie*. dans DOE, pp.753–754.
- 29) D. DIDEROT, *Entretiens sur le fils naturel*. dans DOD, Tome I, pp.98–99.
- 30) D. DIDEROT, *Encyclopédie*. dans DDE, Tome V, p.644. cf. OHD, Tome II, pp.138–139.
- 31) DRL, pp.560–561. cf. NE, pp.346–347.